

幸福のありか——*The Iceman Cometh*における 天邪鬼のころ

天野 貴史

【要約】

幸福の追求は、アメリカ独立宣言で謳われた 3 つの不可侵の権利のうちの一つだが、Eugene O'Neill の戯曲 *The Iceman Cometh* (1946) は、幸福の追求が貧しさしかもたらさず、たとえ幸せのようなものがもたらされたとしても、それは死の安らぎでしかないという皮肉により幕を開ける。財産を手に入れることが幸福をもたらさないとすれば、O'Neill は幸福のありかをどこに求めたのか。本稿は、Ralph Waldo Emerson が提唱した「自己信頼」の思想と、Edgar Allan Poe が「天邪鬼」と呼んだ「最も原始的な衝動」とのせめぎ合いを作品から読み取ったうえで、O'Neill が本作において、自己信頼の信仰にも、1930 年代に生じた「現代の悲劇」の流行にも同調せず、むしろ Poe を経由して脱 Emerson の思想に傾倒したことを明らかにする。自己信頼への執着が自己の普遍性どころか卑小化しかもたらさず、絶望を生き延びるための慰みさえコントロールできず、幻想の渦のなかわずかに残っていた主体性さえ失っていく——本作が描き出す幸福の追求はあまりに悲劇的かつ皮肉に満ちており、それゆえに O'Neill は 1939 年に脱稿しながらも戦後までその上演を延期したのだろう。

1. “It’s a great game, the pursuit of happiness.”

Judith Barlow が指摘するように、Eugene O’Neill は“happy”という語にこだわって *The Iceman Cometh* (1946) の執筆をすすめた。“In the manuscript, the second act alone concludes with this word [happy]. Act III was edited in the typescript to end on *happy*, and the first act was cut in plate proof to close on this adjective” (Barlow 24). 全 4 幕のうち、はじめの 3 幕を“happy”で終わらせることにより、O’Neill としては、ある種の皮肉を観客に印象づけたかったのだろう。すなわち、幸福の伝道師が幸福をもたらさず、伝道師自身もじつは幸福でなかったという顛末である。結果的にこうした反復がのちの上演で実現することはなかったが、O’Neill が本作品において“happy”という語を意図的に、そして皮肉を込めて用いたことは、こうした創作過程から読み取ることができる——以上が、Judith Barlow の議論である。

しかし、幕切れまで待たずとも、すでに第 1 幕冒頭から“happy”に対する O’Neill の皮肉は明らかである。

ROCKY. ... Jeess, I’ve seen him bad before but never dis bad. Look at dat get-up. Been playin’ de old reliever game. Sold his suit and shoes at Solly’s two days ago. Solly give him two bucks and a bum outfit. Yesterday he sells de bum one back to Solly for four bits and gets dese rags to put on. Now he’s through. Dat’s Solly’s final edition he wouldn’t take back for nuttin’. Willie sure is on de bottom. I ain’t never seen no one so bad, except Hickey on de end of a coupla his bats.

LARRY. (sardonically) It’s a great game, the pursuit of happiness. (572)

ふたりが話題にしているのは、ハーバード大学法学部出身の Willie Oban である。弁護士を目指しながらも酒におぼれ、いまやこの“*No Chance Saloon*”とも“*Bedrock Bar*”とも“*The End of the Line Cafe*”とも呼ばれる酒場に入り浸る Willie は、パーティーの Rocky Pioggi が述べるように、まさに人生の「どん底」にいる。Larry Slade は泥酔した Willie のみすぼらしいなりを見て、幸福の追求が貧しさしかもたらさず、たとえ幸せのようなものがもたらされたとしても、それは死の安らぎでしかないことに皮肉を感じ、そのような現実をあざ笑うのである。

いうまでもなく、幸福の追求とは、アメリカ独立宣言で謳われた 3 つの「不可侵の権利」のうちの一つである。“We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain

unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness”. 独立宣言には「生命・自由・財産」という John Locke の自然権の反映を読み取ることができるが、Joseph J. Ellis によれば、起草にあたって Thomas Jefferson がもっとも直接に影響を受けたのは、独立宣言の前月に採択された「バージニア権利章典」(Virginia Declaration of Rights) である (Ellis 56)。その序文にはこう記されている。“All men are created equally free and independent and have certain inherent and natural rights ..., among which are the enjoyment of life and liberty, with the means of acquiring and possessing property, and pursuing and obtaining happiness and safety” (qtd in Ellis 65)。Ellis によれば、Jefferson は「財産」(property) という表現が奴隷制を容易に想起することから、「財産の所有」を削除し「幸福の追求」を残した (Ellis 65-66)。しかし両者が元来、“and”で結ばれる関係だったことは見逃せない。先に挙げた *The Iceman Cometh* の場面における Larry の皮肉は、この両者の結び付きを前提にしている。Larry の目には、所有の放棄が——皮肉にも——幸福の獲得をもたらすものと映ったのである。

さて、財産を手に入れることが幸福をもたらさないとすれば、O'Neill は幸福のありかをどこに求めたのか。本稿は、その答えを、Ralph Waldo Emerson が提唱した「自己信頼」の思想と、Edgar Allan Poe が「天邪鬼」と呼んだ「最も原始的な衝動」とのせめぎ合いのなかに求めるものである。

2. Hickey の超越的な幸福の追求

まず最初に、Theodore Hickman (Hickey) が「19 世紀の」セールスマンであることを確認しておきたい。¹ Hickey のことを知らない Don Parritt に対して、Larry は次のように述べる。“A hardware drummer. An old friend of Harry Hope’s and all the gang. He’s a grand guy. He comes here twice a year regularly on a periodical drunk and blows in all his money” (577)。やがて姿を現した Hickey は持ち前の愛想のよさで酒場に溶け込む。ト書きは彼の身なりを次のように示す。“His clothes are those of a successful drummer whose territory consists of minor cities and small towns – not flashy but conspicuously spic and span” (607)。しかし、真の自己に向き合うことを執拗に迫る Hickey に対して、酒場の住人は“Dat lousy drummer” “lying drummer” “that cheap drummer” “That drummer son of a drummer!” と言って苛立ちを隠さない (623, 641, 661, 667)。

Hickey に対して繰り返し用いられる“drummer”とは、サンプル商品を詰め込んだスーツケース片手に、全国各地の商店をまるで渡り鳥のように巡回する販売員のこと

である。彼らは南北戦争以前から地方と都市をむすぶ「パイプ」(“middleman”)としてアメリカ経済の一翼を担っていたが、1907年にWalter D. Moodyが、“The old-time ‘minstrel’ travelling man is a thing of the past, and with him have gone the days of getting business by means of circus tricks, chi-canery, and sleight-of-hand performances in tact” (17)と述べて、新しい時代の幕開けを告げたように、不品行で派手な衣装を好む“drummer”は、市場経済の近代化を前にして退場を余儀なくされる。代わりに登場したのが新しいタイプの近代的な“salesman”であり、彼らは洗練されたセールスマニュアルに従って効率的かつ組織的にビジネスを展開していった。したがって、古いタイプのセールスマンであるHickeyは、いわば19世紀の亡霊として、酒場の住人の前に、劇を見ようと集まった観客の前に、そしてわれわれ読者の前に立ち現れるのである。

さて、Harry Hopeの酒場に現れたHickeyは、周囲の期待に反して乾杯の酒をことわる。飲酒は聖書に反するというのではなく、心の平静を手に入れたからだという。

The only reason I've quit is – Well, I finally had the guts to face myself and throw overboard the damned lying pipe dream that'd been making me miserable, and do what I had to do for the happiness of all concerned – and then all at once I found I was at peace with myself and I didn't need booze any more. That's all there was to it. (609)

事の真相は後述するとして、ここで述べられるのは、偽りの自己を生きる日々から抜け出すことに成功した自身の体験である。いまや幸福のセールスマンとなったHickeyは、酒場の住人にも同様の経験をしてほしいと願い、真の自己と向き合うことの重要性をしきりに説く。ところが、酒場の男たちはHickeyの変化に困惑し、酒も飲まずに部屋に逃げ込む。しかしHickeyの救済への意思は固い。

He's been hoppin' from room to room all night. Yuh can't stop him. He's got his Reform Wave goin' strong dis mornin'! Did yuh notice him drag Jimmy out de foist ting to get his laundry and his clothes pressed so he wouldn't have no excuse? And he give Willie de dough to buy his stuff back from Solly's. And all de rest been brushin' and shavin'demselveswid de shakes – (652)

Jimmy TomorrowもWillie Obanも酒場にしか居場所を見いだせない臆病者である。

ボーア戦争で通信員だった Jimmy は、しきりに職場復帰への夢を口にすけれども、彼の愛称が示すとおり、いつも酒を言い訳にしては「明日だ、明日こそ」と言って行動するのを先延ばしにしている。前述した Willie もまた、弁護士になることを夢見つつも、勇気をもって酒を断つことができないでいる。酒場を人生の拠り所にするのは彼らだけではない。酒場の経営者 Harry もまた然りである。かつて Tammany Hall の有力者だった彼は、妻の死をきっかけに酒場に閉じこもるようになり、20 年経った今なお一步も外に出ていない。Hickey のねらいは、そうした彼らを「外に出す」ことだった。

こうした Hickey のふるまいに超越主義 (Transcendentalism) の影響を見ることはできないだろうか。19 世紀アメリカを代表する学者であり、「内なる神」の発見により信仰に革命をもたらした Ralph Waldo Emerson は、エッセイ「自己信頼」 (“Self-Reliance,” 1841) において「不服従」 (nonconformity) の重要性を説く。

Whoso would be a man must be a nonconformist. ... I remember an answer which when quite young I was prompted to make to a valued adviser, who was wont to importune me with the dear old doctrines of the church. On my saying, What have I to do with the sacredness of traditions, if I live wholly from within? my friend suggested, — “But these impulses may be from below, not from above.” I replied, “They do not seem to me to be such; but if I am the Devil’s child, I will live then from the Devil.” No law can be sacred to me but that of my nature. Good and bad are but names very readily transferable to that or this; the only right is what is after my constitution, the only wrong what is against it. (Emerson 261-62)

社会の伝統や規範に背こうとすればたちまち非難の憂き目に遭うけれども、それでも「私の本質」を信じて「完全に内面に従って生きる」道を選ぶべきである——まさに Emerson 哲学の要諦をなす一節である。こうした Emerson の教えに従って、社会と一線を画した生き方を実践したのは Henry David Thoreau である。独立記念日を森のなかで過ごした Thoreau は、そこで 2 年余りに及ぶ生活を振り返った著書『ウォールデン』 (*Walden*, 1854) のなかで、自己という存在の大海原を探検するコロンブスになれ、と呼びかけたあと、大切なのは「度を一越す」 (extra-vagant) ことであると述べる。

I fear chiefly lest my expression may not be *extra-vagant* enough, may not wander far enough beyond the narrow limits of my daily experience, so as to be adequate to the truth of which I have been convinced. *Extra vagance!* it depends on how you are yarded. ... I desire to speak somewhere *without* bounds ... for I am convinced that I cannot exaggerate enough even to lay the foundation of a true expression. (Thoreau 324)

“extra-vagant”とは、その語源が示すとおり、「外に」(extra)「さまよい歩く」(vagari) ことである (Schueller 35)。Thoreau にとって真の自己とは、伝統や慣習にまみれた日常生活から抜け出すことによつてのみ到達できる領域であり、だからこそ彼は Concord 村から1マイル半ほど南にある湖のほとりにさまよい出たのである。そして、*The Iceman Cometh* の Hickey もまた内面の探究者である。Harry をはじめとする Hickey の友人は、「パイブドリーム」(pipe dream) が伝統の酒場に「囲い込まれた」状態にある。Hickey の使命は彼らを「外に出す」ことで本来の自己に至る道を示すことであり、それは超越主義の観点から幸福の追求にアプローチすることである。

3. 自我と良心の葛藤——Edgar Allan Poe の“William Wilson”

しかしながら、自己とはまったくの信頼が置けるほど安定したものなのか。Emerson や Thoreau の同時代人のなかには、楽天的な個人主義に背を向け、むしろ自我が抱える混乱や矛盾に目を向ける作家がいた。Edgar Allan Poe である。Poe は自己信頼の思想に否定的であり、超越主義という「病」(disease) にかかった「悲しき犬」(a sad dog) が悪魔の指示に従ったがゆえに「頭を失う」(deprived of his head) という物語 “Never Bet the Devil Your Head” (1841) を書きさえた。そこで、*The Iceman Cometh* における幸福の追求を別の角度から考察するために、ここではまず、自我と良心の葛藤を主題とした Poe の短編 “William Wilson” (1839) を見ておきたい。

“Let me call myself, for the present, William Wilson” (337). 物語の主人公は、その名のアナグラムが示すように (Will I Am, Wil Son)、強固な「意志」の持ち主である。しかし彼の場合、富や成功を夢見て節制と勤勉にはげんだのではなく、むしろ「私の本質という法則」(Emerson) に従って墮落に邁進した。Eaton 校では悪友のもと酒池肉林の宴 (our delirious extravagance [348]) を毎夜繰り広げ、Oxford 大学ではイカサマ賭博に手を染めて新入生を破産に追い込み、ナポリの公爵邸で催された仮面舞踏会では、卑しくも公爵夫人を誘惑しようと試みる。

いっぽう、作品冒頭のエピグラフ、“What say of it? What say CONSCIENCE grim,/That spectre in my path?” (337) が暗示するように、Wilson は度重なる「良心」の出現に悩まされる。ただし、それは Wilson に憑りついて彼のすべてに干渉するのではなく、Wilson の愚行が「度を越した」(Thoreau) ときに限って——そのまましておけば必ずや恐るべき禍いが降りかかる場合にのみ——姿を現しては、彼の名を耳元で「ささやく」のである。かくして良心は Wilson のイカサマを暴露し、そのことで大学を追われた Wilson がその後ヨーロッパのどこに逃げ込もうとも、神のごとく彼を見つけ出しては、彼の悪行を寸前のところで食い止める。

やがて、両者の対決の時が来る（語り手はそれを「宿命」と呼ぶ）。またしても良心の妨害を受けた Wilson は、宿敵を舞踏会の控室に引きずり込むと剣を抜くよう命じる。決闘は一方的で、Wilson は幾度となく相手の胸を刺し抜く。そして、瀕死の相手が自分にそっくりの声でこう述べるのを聞く。“You have conquered, and I yield. Yet, henceforward art thou also dead – dead to the World, to Heaven and to Hope! In me didst thou exist – and, in my death, see by this image, which is thine own, how utterly hast murdered thyself” (356-57).

いうまでもなく、良心とは内なる他者のことである。フロイトを持ち出すまでもなく、良心は自我を監視し、とかく欲望に傾きがちな自我に忠告を与えるのを義務としている。問題は、自己の中の他者の部分を取り除いたあとに何が残るのか、という点である。Emerson が信頼した「本質」(my nature) か、あるいは Wilson が直面するであろう破滅か。*The Iceman Cometh*をこうした観点から読み直すとき、O'Neill の立場は Emerson よりも Poe に近いように思われる。次の章では、*The Iceman Cometh*における3人の主要人物——Don Parritt、Theodore Hickman、Harry Hope——を取り上げて、「自己信頼」に根差した Hickey のねらいがことごとく失敗するさまを観察する。

4. 「自己信頼」という名のパイプドリーム

無政府主義者を母に持ち、自身も活動家だった Don Parritt は、遊ぶ金欲しさに仲間を裏切る。爆弾テロに関与した疑いで仲間が次々と拘束される一方、彼だけは逮捕を免れる。しかし、母の逮捕という予想外の事態を招いたことで、彼の中に罪悪感が芽生え、それは次第に大きくなり彼の心に重くのしかかる。ところが、その根本を断とうにも、母は塙の中に閉じ込められており（しかも終身刑）、彼にはどうすることもできない。また、母の写真を燃やしたり遠く離れた土地に移り住んだところで、母の視線から逃れることはできず、かえって罪の意識が強まるだけである。やがて、自

責の念に駆られた彼は、裏切り者にふさわしく、自ら死を選ぶ。

Parritt のケースが示すのは自我の敗北であり、葛藤のすえに良心に服従した彼は、いわば意志の弱い William Wilson である。Hickey の超越的な生き方に心を動かされたにもかかわらず、彼は自己の内面ではなく、良心に従って「外に出る」＝「非常口から足を踏み出す」(hop off the fire escape) ことを選択してしまう。Emerson/Thoreau 的な生き方がいかに困難であることを示す一例である。

反対に、自我が良心を征服したのが Hickey のケースである。彼には寛大すぎる妻がいた。旅回りのセールスマンである Hickey が地方のホテルで女遊びに興じたり、酒場に入り浸って家に帰ってこない日が続いたりしても、妻は彼の振る舞いを咎めることはせず、むしろ許しを乞う Hickey に対して、“I know it’s always the last time, Teddy. You’ll never do it again” (696) と述べて、彼を信じ続ける。しかし長年の悪癖を断つのは容易ではなく、Hickey は誘惑に負けて元の生活に舞い戻ってしまう。それでも妻の信念は揺らぐことなく、何度裏切られても「明日こそは」と言って Hickey を許し続ける。やがて Hickey は自己嫌悪に陥り、誤った夢を見続ける妻を憎むようになる。そしてある日の夜、就寝中の妻を銃殺する。

問題はその後である。Hickey は亡き妻に向かって、“Well, you know what you can do with your pipe dream now, you damned bitch” (700) と吐き捨てる。これが「完全に内面に従って生きる」ことで辿り着くという、あの「神聖な」自己の姿なのか。あまりにも卑小な自己の出現に慄然とした彼は、もはや「あの時、私は気が狂っていたのだ」(703) と言って自己否定するしかない。振り返れば、酒場に姿を現して以来、Hickey は「真の心の平和」(real peace) を手に入れたと繰り返し述べていたが、結局のところ、それは「誤った夢」(pipe dream) でしかなかったことがここで明らかになる。

ところで、自我が良心と妥協したケースはどうだろうか。妻の死をきっかけに酒におぼれる日々を送っていた店主 Harry Hope は、幸福のセールスマン Hickey に説得されて、ついに酒場の外に出る決意をする (Hickey が述べるように、それは亡き妻の願いでもあった)。しかし足を踏み出すや怖気づいて道も渡れない。あえなく店に舞い戻った彼は、“Feel all in. Like a corpse, bejees” (677) と述べて酒を口にする。ところがいくら飲んでも酔えず、予想外のことに彼は呆然とする。同様のことは、Jimmy Tomorrow をはじめ Hickey の指示に従ったすべての住人にも起きる。こうして生気を失った酒場は、まるで「死体置き場」(morgue) の様相を呈する。

Hickey の指示に従ったところで、約束したはずの「真の心の平和」は手に入らなかった。パイプドリームという偽りの自己から抜け出した先にあったのは、「本来の

自己」という名のもう一つのパイプドリームであり、それはドリームであるがゆえに決して実現することはない。しかも、酔えない酒が示すように、もはや元の自己に舞い戻ることは許されない。信頼できる自己を手に入れるどころか、当の自己を失う羽目になるという皮肉——それこそが Hickey による幸福の追求がもたらした成果にほかならない。

5. 幸福のありか——天邪鬼なエンディング

それでは、*The Iceman Cometh* には絶望しかないのだろうか。エンディングでは一転して陽気なパーティーが始まり、酒場はこの日一番の盛り上がりを見せる。

HOPE. (calls effusively) Hey there, Larry! Come over and get paralyzed! What the hell you doing, sitting there? (Then as Larry doesn't reply he immediately forgets him and turns to the party. They are all very drunk now, just a few drinks ahead of the passing-out stage, and hilariously happy about it.) Bejees, let's sing! Let's celebrate! It's my birthday party! Bejees, I'm oreeyed! I want to sing! (710-11)

ようやく酔いが回り始めた Harry Hope が歌い出すと、酒場の住人もそれぞれ好みの曲を一斉に歌い始める（彼らもすでに酔いを取り戻している）。すると、それまでおとなしくしていた Hugo Kalmar が突然立ち上がり、テーブルを叩きながら、フランス革命時に市民が歌っていた「カルマニョール」を熱唱し、そのあまりの大声に野次と笑いが店内を飛び交う。こうしてかつての活気を取り戻した酒場だが、いったい彼らに何があったのか。

Hickey が狂気に訴えて妻への暴言を打ち消そうとするのを見て、Harry は一筋の希望を見出す。なぜなら、狂気の沙汰ということになれば、これまでの出来事はすべてなかったことになり、正気を取り戻したい彼にとって、これほど都合のよいことはないからである。Harry はさらに、外に出るなどという愚行に走ったのはひとえに Hickey の狂気を満足させるためであり、それは本心からではなく演技であったとさえ述べる。すると Jimmy たち他の住人も彼に同意し、Hickey のおかげでどれほどの苦勞をさせられたかを口々に語り出す。しかし、ここで見逃してはならないのは、ト書きに示される不安である。

HOPE. ... Look at me pretending to start for a walk just to keep him quiet. I knew damned well it wasn't the right day for it. The sun was broiling and the streets full of automobiles. Bejees, I could feel myself getting sunstroke, and an automobile damn near ran over me. (He appeals to Rocky, afraid of the result, but daring it.) Ask Rocky. He was watching. Didn't it, Rocky?

ROCKY - ... (earnestly) De automobile, Boss? Sure, I seen it! Just missed yuh! I thought yuh was a goner. (He pauses – then looks around at the others and assumes the old kidding tone of the inmates, but hesitatingly, as if still a little afraid.) On de woid of a honest bartender! (He tries a wink at the others. They all respond with smiles that are still a little forced and uneasy.)

HOPE – (flashes him a suspicious glance. Then he understands – with his natural testy manner) You're a bartender, all right. No one can say different. (Rocky looks grateful.) (705-06)

Harry は自らの不甲斐なさを天候と交通量のせいにして、Rocky に同意を求める。しかしト書きが示すように、彼のまなざしには不安が宿る。Rocky は反論せず、むしろ Harry に話を合わせるよう他の住人に合図を送るが、彼らの様子にも不安がつきまとう。いっぽう、Harry は期待通りの反応が得られたにもかかわらず素直に喜ぶことができず、Rocky に疑いのまなざしを投げかける。

Edgar Allan Poe が提唱した「天邪鬼」(the spirit of perverseness) は、こうした不安を理解するのに役に立つ。それは短編“The Black Cat” (1843) において以下のように示される。

... perverseness is one of the primitive impulses of the human heart – one of the indivisible primary faculties, or sentiments, which give direction to the Man. Who has not, a hundred times, found himself committing a vile or a silly action, for no other reason than because he knows he should not? Have we not a perpetual inclination, in the teeth of our best judgement, to violate that which is Law, merely because we understand it to be such? (Poe 599)

それまで何とも思っていなかったのに、やっではならないことだと分かった瞬間に、

無性にそれがしたくなる——天邪鬼とはそうした抑えがたい衝動である。たとえば、Poe が短編“The Imp of the Perverse”（1845）で挙げるように、講演会であえて回りくどい言い方をして聴衆の機嫌を損ねてみたい、急いで片づけなければならない仕事があるのにいつまでたっても手をつけない、崖の上に立つと飛び降りたくなる、自分が犯人だと人に言いたくなる、といった例が挙げられる。このように天邪鬼とはまったく理性的でない振る舞いであり、Poe はそれを「最も原始的な衝動」（“*prima mobilia*”）と呼ぶ。

そして先の場面で描かれるのも、この「天邪鬼」である。Hickey の導きによって自己を偽ることの無益さを痛感したにもかかわらず、Harry はうその理由を述べる。Rocky は Harry のうそを見抜いていながらも、また他の住人も嘘を嘘で塗り固めることに後ろめたさを感じながらも、それでも Harry のうそに加担する。してはならないことをしているという意識はもちろん彼らに不安をもたらすが、天邪鬼に関して見逃してはならないのは、それがささやかな安らぎをも与えるということである。Harry はそのことを心得ている。だからこそ彼は酒場の空気をいち早く「理解」し、率先して罪の意識の共有を図るのである。終幕の狂宴は、一人一人のささやかな安らぎが集まって大きな渦になったものであり、この「絶望酒場」に初めて「幸福」がもたらされた瞬間であった（ただし、その「幸福」は理性やセルフ・コントロールの放棄によって得られるものであり、従来型の幸福の追求を信奉する観客・読者には、相変わらずの絶望と映ることだろう）。

6. 現代の悲劇／皮肉

1930 年代に生じた悲劇の隆盛について、平石貴樹は「現代における人間の「卑小化」に対抗する、人間の尊厳の回復への志向」（平石 403）と説明する。振り返れば、強固な自己信頼にもとづく Emerson の思想は、さまざまな留保や懐疑をとめないながらも、広範な支持を受けてアメリカ社会で大衆化していったが、第一次大戦後の繁栄と狂乱のジャズ・エイジに入ると、自我はもはや欲望をコントロールすることができず、その一貫性・信頼性を失っていく。こうして自我の分裂や希薄化が不可避の事態になると、その虚構性を厳しく問いつめる作家が続々とあらわれる一方で、人間の主体性に「小さなロマン主義」の視線を投げかける作家も少なからず登場し、かつての自由と夢を取り戻すべく運命にいどみ敗れる人びとの孤独と苦悩を描いた「現代の悲劇」が流行した。したがって、自己信頼の思想に秩序の回復や救済のささやかな可能性を求めるのが、この時代の悲劇の特徴である。

ところが、O'Neill が *The Iceman Cometh* で描いたのは、自己信頼による幸福の

追求がもたらす悲劇である。真の自己と向き合うことで本当の幸福が手に入るという信念に突き動かされて、酒場の住人は Poe の主人公 William Wilson のごとく、自己のなかの他者と生死をかけた戦いを繰り広げる。ある者は戦いに敗れ、ある者は、勝利によって得られたものが卑小な自己でしかないとわかると、その卑小さに耐えられずに絶望する。酒場の主人をはじめとする住人は、戦いの果てに偽りの自己であるパイプドリームへ舞い戻る。しかしそれは、Emerson が完全に自己の内面に従って生きようとしたのと同じではない。むしろ、自己を偽ることの無益さに意識的である点において、それは Poe が「天邪鬼」と呼んだ「最も原始的な衝動」であり、罪の意識のなかにささやかな救済を求める態度である。

こうして O'Neill は *The Iceman Cometh* において、自己信頼の信仰にも「現代の悲劇」の流行にも同調せず、むしろ Poe を経由して脱 Emerson の思想に傾倒した。自己信頼への執着が自己の普遍性どころか卑小化しかもたらさず、絶望を生き延びるための慰みさえコントロールできず、幻想の渦のなかわずかに残っていた主体性さえ失っていく—— *The Iceman Cometh* が描き出す幸福の追求はあまりに悲劇的かつ皮肉に満ちており、それゆえに O'Neill は 1939 年に脱稿しながらも戦後までその上演を延期したのだろう。

本稿は、日本アメリカ文学会第 54 回全国大会（京都大学、2015 年 10 月 10 日）にける口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

注

1. *The Iceman Cometh* を “New York nostalgia” と呼んで、19 世紀の観点から作品をいち早く読み直したのは、John H. Raleigh である (66-75)。しかし、Hickey が 20 世紀の “salesman” ではなく、19 世紀の “drummer” であることは見逃されている。

引用文献

Barlow, Judith E., *Final Acts: The Creation of Three Late O'Neill Plays*. U of Georgia P, 1985.

Ellis, J. Joseph. *American Sphinx: The Character of Thomas Jefferson*. Alfred A. Knopf, Inc., 1996.

Emerson, Ralph Waldo. *Essays and Lectures*. Ed. Joel Porte. New York: The Library of America, 1983.

Moody, Walter D. *Men Who Sell Things*. Chicago: A.C. McClurg, 1907.

O'Neill, Eugene. *The Iceman Cometh*. 1939. *Complete Plays 1932 -1943*. Ed. Travis Bogard. New York: Library of America, 1988. 561-711.

Poe, Edgar Allan. *Poetry and Tales*. Ed. Patrick F. Quinn. New York: The Library of America, 1983.

Raleigh, John Henry. *The Plays of Eugene O'Neill*. Carbondale, Ill.: Southern Illinois UP, 1965.

Schueller, Malini. "Carnival Rhetoric and Extra-Vagance in Thoreau's Walden." *American Literature* 58.1 (1986): 33-45.

Thoreau, Henry David. *Walden*. 1854. Ed. Lyndon Shanley. Princeton: Princeton UP, 1971.

平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2010年。

Summary

“It’s a great game, the pursuit of happiness.” Eugene O’Neill’s 1946 play *The Iceman Cometh* opens with an ironic remark on the American belief that happiness is obtained through the possession of property. The play goes on to describe an alternative pathway to happiness: 19th century Transcendentalism. Ralph Waldo Emerson famously said “if I am the Devil’s child, I will live then from the Devil” and emphasized the importance of being self-reliant. His successor Henry David Thoreau cried “*Extra vagance!*” and told the reader to “wander far enough beyond the narrow limits of my daily experience.” But the play treats the Transcendental pursuit of happiness unfavorably – it becomes a total failure and is replaced by its antithesis: “the spirit of perverseness.” The primitive impulse to “do wrongs for the sake of wrong only” can be the cause of anxiety but the sense of happiness it brings cannot be denied as the hilarious party that concludes the play testifies. O’Neill finished the play in 1939 but decided to postpone its production until the war ended. The perverse pursuit of happiness he sought in the work was that ironic.